

てインド人、それも瞿曇 (Gautama)、矩摩羅 (Kumāra)、迦葉 (Kāśyapa) 三家のインド人であつたし、唐代における度々の改曆も殆んど常にインドの天文・曆法に基いて行われたものであつた。殊に玄宗の開元六年(七一八)頃、瞿曇悉達 (Gautama Siddhārtha) が翻譯したインドの九執(九曜)曆の如きは唐代は勿論、それ以後も永く朝廷の参考に供された一方、廣く民間にも行われたのであつた。

ところが九執曆が一體何故このように廣く民間にも行われるに至つたのかと言へば、それは九執即ち九曜の名からしても察せられるように、多分に占星術を交えたものであつたからであると考えられる。八世紀の末頃、インド(西天)から傳來したと伝えられる都利聿斯經の如きも、天文・曆法よりは寧ろ占星術の書物であつたらしいし、佛典の中にも宿曜(すくよう)經のように専ら占星術について述べたものが見出される。この經典には當時占星術がインドばかりでなく、廣く西方諸國で信仰されていたことを述べ、七曜日の名稱についても、それぞれ胡名・波斯名・梵名を掲げているが、唐代及びその以後に行われた具注曆、またそれを受け入れて行つた我が王朝時代の具注曆に見える七曜の名稱が、そこに記されてある胡名即ちソグド語のそれを傳えたものであることは、今世紀初頭以後盛んに行われた各國の中央アジア探檢の結果として始めて明かにされたことで、西域文化の東流に關する注意すべき事柄である。

宗教 隋唐時代に最も隆盛を極めた外來宗教としては、もとより佛教を挙げなければならぬ。北魏の太武帝・北周の武帝の相次ぐ彈壓によつて一時衰微を極めた佛教も、隋の建國とともに急速にその勢力を回復し、唐代には玄奘・義淨らが入竺して求法した一方、インド、西域の高僧の傳法したのも多く、遂に中國佛教をして大成の域